

# 明代の大藏經と古禪籍

椎名宏雄

## 一 明藏の種別

宋元版禪籍の文献史的研究にとつて、同時代の大藏經に入藏している禪籍類の考察は、もつとも重要で大きな分野である。こうした観点から、筆者はさきにこの分野に対して、入藏禪籍の状況と傾向、およびその文献史的歴史的意義などについて、基礎的な方面的考察・検討を試みたが、ここでは宋元版禪籍に関する同じ研究の一環として、明代の大藏經に入藏している禪籍類を対象とするものである。<sup>(2)</sup>

いうまでもなく、宋代の大藏經は、宋元版の研究にとつては同時代の刊行書であるから、文献的にはナマの直接資料としてきわめて重要である。ましてやその原本が存在している場合は、それはなおさらである。これに対して、明代以後の入藏禪籍については、目的とする範囲は、当然ながら前代までにすでに成立しているいわば古禪籍のみに対象が限定さ

れるのみならず、それら古禪籍類の前代までのテキストとの比較によって、相互の異同をたしかめ、明代における保存や変遷を知るという作業内容とならなくてはならない。つまり、まず基本的には、古禪籍が明代の諸大藏經にどれほど入藏しているか、そこにはどんな傾向や性格がみられ、また、それらの底本は何であるか、などの諸点を中心につくることが、当面の目的となる。以下、このような意図のもとに、明版大藏經中の入藏古禪籍についてみてゆきたい。

ところで、こうした作業を行うにあたっては、じつは基本的に大きな問題点が三つある。第一は明版の大藏經（以下、総称して明藏とする）といつてもけつして単純ではなく、その種別が複雑なことである。第二は目錄類の問題である。第三は、明藏そのもののテキストが日本では容易に閲覧できなかつたことである。

いうまでもなく、ふつう明藏といえば、明代の初めに南京

で開版されたいわゆる南藏、これについて北京で開版されたいわゆる北藏、および、明末から清初にかけて五台山・徑山で開版された方冊本の嘉興藏（または徑山藏・万曆藏）という三種の別のあることが知られている。そして、さいごの嘉興藏には、のちに続藏・又続藏が加わって、中国撰述仏典の大宝庫となつてゐることや、嘉興藏がわが黄檗藏の底本であることなども、斯界の常識であろう。このように、明藏に対する仏教界一般の認識としては、南藏・北藏・嘉興藏の三種があり、各テキストは、おおむね南藏→北藏→嘉興藏→黄檗藏という系譜を形成するというのが、ほぼ常識的な理解であった。

しかし、明藏に対するこのような認識は、じつは明藏なるものの文献研究のおくれにもどづくものである。世界にはこるべき大正大藏經の棹尾をかざる「昭和法寶總目錄」全三巻は、名山大刹をはじめとする各種大藏經の調査によつて築かれた金字塔であるが、その公刊以後、かえつて大藏經の研究は停滞してしまつた。とりわけ明藏に関しては、宋元代の大藏經研究よりもはるかに遅れをとつてしまつたのである。そのおもな理由は、中國大陸には比較的多く遺存している南北両藏の調査や紹介がほとんどなきれなかつたこと、日本には明藏そのものの所蔵が曉天の星であつて、現物の閲覧が困難な状態であつたことによると思われる。

もつとも、大陸では一九三九年に最古の南藏のセットが四川省崇慶県の上古寺で発見されて、呂澂氏による紹介がなされたのであるが、この貴重な「南藏初刻考」<sup>(3)</sup>なる紹介論文は学界で注意されることなく、いたずらに半世紀近くも不問に付されていたのは、きわめて不幸なきことであつた。これは、当該の論文が掲載された雑誌が不明なために入手が容易でなかつたという理由もさりながら、南藏そのものにも多くの種別があることすら注意されぬ、明藏一般に対する研究のおくれを如実に示すものであろう。ともあれ、ようやく一九八一年に張新鷹氏が右の呂論文に着目し、これを進展させた論文「關於佛教大藏經的一些資料」<sup>(4)</sup>を公表し、大陸の南藏研究の状況がわが国にも紹介されることになったのである。

日本における第二次大戦後の明藏研究は、さきにもいうとおり寥々たる状態であつたが、近年になつてからは、長谷部幽蹊・野沢佳美の両氏による意欲的な研究が開始されて、ようやく長かつた暗夜に大きな光が灯されることになつた。

すなわち、長谷部氏は、広く明代以降における大藏經開雕の経緯を研究された一連の論叢<sup>(5)</sup>の中、明藏個々のそれに対しても貴重な考究をなされている。とりわけ、南藏には洪武・永樂・嘉靖・万曆の四種、北藏には初刻本・景泰本・万曆本の三種、がそれぞれあることを明示し、また從来あまり注意されていない南北両藏についてもかなりの紙幅をさい

て、これら個々の藏經の数量や開雕・完雕の時期を中心とした基礎的な考究を、可能なかぎり追究している。こうした研究をなすにあたって、氏は明代の諸資料を広く涉獵するとともに、これまで公にされた中日の明藏研究者の諸論文をも豊富に用いて、いわば従前の明藏研究を総括している点で、すぐれた労作であり、斯界を裨益するものである。

これに対して、日本に現存する南藏の遺品を実際に鋭意調査され、その克明な調査報告をふまえて、従来不明であった開雕史の基礎的方面を意欲的に解明されているのが野沢佳美氏である。すなわち、氏はこれまでまったく知られていないかった立正大学図書館に所蔵される南藏二六八部五五〇帖を詳細に調査し、まずその現存目録と解題を刊行された。<sup>(6)</sup>また、所在こそ知られてはいたが調査報告も現存目録も公刊されていない山口県快友寺に所蔵される南藏を調査し、特に続入藏經典についての現存目録と解題を公表し、<sup>(7)</sup>また、初入藏經典五種を影印刊行している。<sup>(8)</sup>そのほかに、立正大・快友寺の両南藏中に含まれる『古尊宿語錄』を、その資料的重要性から別個に影印刊行し、これらの調査研究による新しい成果をつぎつぎに論文で公表するなど、南藏研究に新しい分野を築き、すこぶる学界に貢献をされている。

このように、両氏による意欲的な研究によつて、従来おくれていた明藏研究が、基礎的な分野でいちじるしく進展して

いるのが現状である。特にその南藏の正体が解明されつたのは、それらのうちの主要仏典の影印刊行とともに、今後ひとり明藏研究のみならず、中国佛教史ないしは中国仏典の文献史研究のためにも、大きく裨益するものと注目されるところである。

さて、上に紹介してきた先学の諸研究にもとづいて、これまでに明らかとなつた明藏の種別を、ここに整理して一覧しておくと便利であろう。もつとも、種別の中にはまだ定説となつていなものもある。たとえば、野沢氏によれば、最初の洪武南藏と永樂南藏との板木には、明らかに後者が前者のそれを継承するものがあるといわれる。<sup>(10)</sup>こうした専門的な問題点はあるにせよ、ここではたんに区分して記載しておく。また、表中にみえる少なからぬ空欄は、今後の明藏研究の進展によつて埋まることを切望したい。

## 二 明藏の目録と問題点

さきに、明藏をとり扱うに当つて、基本的に意とすべき第二点は目録であると記した。いうまでもなく、いかなる大藏經でも量的に厖大であるから、そこにどんな仏典が含まれているかを知るには、まず目録によるのは当然である。

知るとおり、「昭和法寶總目録」第二巻中には、南藏・北藏・嘉興藏、つまり明藏の三つの目録が並んで収録されてい

## 明代の大藏經と古禪籍（椎名）

表一 明版大藏經一覽

る。のみならず、嘉興藏の目録には他の何種もの異本との対校が校注で示され、大藏經の研究にとつてすこぶる裨益をなしている。ちなみに、「昭和法寶總目錄」全三巻に収める多くの藏經目録の中で、異本との対校がなされているのは嘉興藏のそれのみであることからも、きわめて注目されるところである。

ところで、〈表一〉に示したように、明藏の種類は非常に多いが、「昭和法寶總目錄」に収められる三つの目録は、はたしてどの大藏經の目録であり、どんな性格をもつてているかを知ることが、明藏の場合はとくに重要であると思われる。そこで以下、各目録別にこうした点を考察しておきたい。

#### (一) 南藏目録

正式には『大明三藏聖教南藏目録』といい、不分巻である。この目録の最大の特徴は、底本が独立した単行書ではなく、『金陵梵刹志』巻四九に収録されている南藏目録を、そのまま「昭和法寶總目錄」に収録していることである。

『金陵梵刹志』全五三巻は、明末の万暦年間に葛寅亮が編集し、同三五年(一六〇七)<sup>(11)</sup>に南京僧録司から初めて刊行されているが、金陵の仏寺のみならず、六朝から明初にいたる江南仏教史の重要な資料として知られている。今日でこそ「中國佛寺史志彙刊」第一輯中に影印収録されて、容易に閲覧が

可能となっているが、それまでは特殊機関のみに所蔵される珍籍であった。本書の巻四九には右の南藏目録と万暦三四年の年記をもつ「請經条例」が収められ、これらを謄写した竜谷大学藏本が「昭和法寶總目錄」本の底本となつたのである。

この南藏目録については、『金陵梵刹志』の巻頭におかれ葛寅亮の自序<sup>(12)</sup>中の文によつて、それが南京報恩寺の藏經目録であることが知られる。つぎにその文を引いておく。  
大藏の鑑に至びては、副墨を報恩の琅函に貯え、寰宇に布む。其の目を標挙せば、端を見て委かに是の藏目を知り、入ること無かるべからず。<sup>(13)</sup>

報恩寺は、かつて天禧寺と称した永樂のはじめから、いわゆる洪武・永樂の両藏經を開版してきただが、万暦年間には万暦南藏を開版し、同三四年(一六〇六)にはその目録を作成し、「請經条例」を制定したのである。『金陵梵刹志』の刊行は、あたかもその翌年のことであつた。したがつて、その巻四九に収められた目録は、万暦南藏を開版した当事者報恩寺の藏版目録であるから、内容的にはもつとも信用のおけるものである。

ただし、この時はまだ南藏に続藏四函は補入されていない。したがつて、この目録は続藏部分を欠いている。これが、この目録を用いるに際して、もつとも注意すべき点である。

る。なお、後にものべるが、わが山口県快友寺所蔵の南蔵は清代の順治年間に印造されたものであるが、ここには続蔵が含まれている。

○日

清代の順治年間に印造されたものであるが、ここには続蔵が含まれている。

## (二) 北蔵目録

正確には『大明三藏聖教北蔵目録』四巻である。いうまでもなく、明初の永楽帝の時代に北京で開版された官版の大藏經を「北蔵」と称し、明末清初まで印造がなされている。右の目録四巻は、「昭和法寶總目録」の脚注欄<sup>14)</sup>では底本を「増上寺報恩蔵本」とするのみで刊写の別を記していないが、筆写本を底本とする場合は脚注で明示しているから、増上寺の底本は刊本とみられる。

本目録の内容構成は、つぎのとおりである。

- 一、北蔵目録総
- 二、藏函号字附（天ノ史）
- 三、大明太宗文皇帝御製藏經讚 永樂八年（一四一〇）  
三月九日
- 四、大唐竜興三藏聖教序 中宗製
- 五、大宋三藏聖教序 太宗製
- 六、大明三藏聖教目録（卷一～四、天函ノ石函）
- 七、御製藏經跋尾 永樂九年（一四一二）一二月
- 八、御製統入蔵經序 万曆一二年（一五八四）一月二

この目録には刊記がみられないが、『金陵梵刹志』卷三一に所収される「続入蔵護勅」や「御製聖母施仏藏經序」などの資料<sup>15)</sup>によれば、慈聖皇太后の発願によつて続蔵四函が北蔵に加えられて頒布をみたのは万曆一四年（一五八六）であるから、目録の刊行はそれより以後であつたと思われる。この目録は、増上寺本のほかに異本は知られていない。これは、本目録が当初から「万曆北蔵」の目録として権威があり、信頼のおかれたことを示すものであろう。

いつたい、北蔵は南蔵と性格を異にし、容易に摺刷印造することは許されず、聖旨を奉じて印造下賜が実施されたの

- 九、大明統入蔵諸集（鉅函ノ史函）
- 十、北蔵缺南蔵函号附（五点）

右のように本目録は、卷頭には唐・宋の各御製聖教序を置き、卷頭と卷尾には当代の御製藏經讚と御製跋を配し、さらに御製の続入蔵經序を置くなど、北蔵が唐宋代の勅版藏經に続く国朝の大藏經であることを天下に示す目録であった。卷末に「北蔵缺南蔵函号附」として、あえて南蔵が収録していいた四点の典籍を除去したリストをあげているところにも、その独自性と削除の権威を誇示している感がうかがわれる。このように、北蔵は南蔵にくらべて、きわめて官版としての色彩の濃いものであった。

は、永樂の初刻のほかには、景泰年中と万曆の開雕のみしか知られていない。<sup>(16)</sup>このように、北藏は勅版という權威色の強い蔵經であったために流布せず、安易に補綴などもなされず、したがつて目録も異本を生む余地がなかつたのである。なお、北藏は後に清代における勅版竜藏の底本となることは、これも周知のとおりである。わが国における所蔵は、ほとんど知られていない。

### (三) 嘉興藏目録

南北両蔵と嘉興藏との間に、杭州昭慶寺で開版された民間の武林蔵があつたが、この蔵經は大蔵經の開版史上、画期的な方冊本であつた。しかし、惜しくもその遺品は、今日までほとんど伝えられていない。<sup>(17)</sup>したがつて、実際に方冊本蔵經として広く世に普及した最初は、明末清初の嘉興藏であつた。

嘉興藏の開雕は、民間の僧俗によつて万曆一七年（一五八九）に五台山で開始されたが、四年後には杭州徑山の寂照庵に移され、装訂発売などは嘉興藏の楞嚴寺で行われた。そのため、この蔵經は万曆藏・徑山藏・楞嚴藏・方冊藏など、多くの異称で呼ばれている。本蔵經の正蔵部分は崇禎一五年（一六四二）から翌一六年ごろ、続蔵は康熙五年（一六六六）、又続蔵は同一五年（一六七六）、のそれぞれ完成であつたが、

なお康熙末年ごろまでは追加入蔵の仏典が付刻されたといわれる。<sup>(18)</sup>

嘉興藏の正蔵部分は北藏を底本とし、宋元の二蔵と明の南蔵によつて対校したものといわれる。北藏と嘉興藏の各目録を比較対照すると、たしかに嘉興藏は北藏の正蔵・続蔵すべての典籍を正蔵として入蔵させている。のみならず、南蔵にありながら北藏で削除した五点の仏典中、『大明三教聖教目録』を除く四点と、新たに『密雲禪師語録』を加えた合計五点を、正蔵の末尾に入蔵させているのである。

密雲円悟（一五六六～一六四二）は、明州の育王山や天童山の住持として活躍し、晩年は金陵大報恩寺にも住した英傑であり、その法嗣には崢々たる人材が出て、いわゆる清初僧諍の立役者となつてゐる。したがつて、嘉興藏の正蔵部分に、あえて北藏の体裁を破つてまで同時代の『密雲禪師語録』一二巻が入蔵したことは、その背景に意図的なものを予想させるに充分であろう。いまは所論の範囲をこえるので、この問題は事実の指摘のみにとどめておく。

こうした例外はあるものの、正蔵は比較的に北藏に忠実であるのにくらべて、續蔵と又続蔵は独自に未入蔵の仏典が集められ刊行されている。その性格は続蔵部分の末尾に「以上蔵外經典并諸方語録雜集共九十函」とあることからも明らかであり、続蔵以下の典籍には千字文ではなく序数詞による函

号が付けられるなど、あくまで蔵外書として扱われていることを知るべきである。事実、収録典籍の撰択は時代を反映し、続蔵では全分量の約 $\frac{1}{3}$ 、又続蔵ではじつに約 $\frac{2}{3}$ が禪宗典籍類で占められ、当時の佛教界における趨勢と関心のほどが示されている。

ところで、「昭和法寶總目錄」第二巻に収録される『藏版經直画一目錄』は、この嘉興藏全体の目錄であるが、脚注によれば、右の題名は大正大藏經編纂者によつて新たに付加された編集名であることが知られ、また、正藏目錄の底本は大谷大学所蔵の民国九年刊本であり、同じく大谷大学所蔵の別の刊本で対校がなされているのである。ところが、「仏書解書大辭典」によれば、民国九年（一九二〇）には北京刻經処から『嘉興藏目錄』<sup>(23)</sup>が刊行され、大谷大学等の所蔵と著録されているから、これが「昭和法寶總目錄」所収本の底本となつたものであり、もともとは『嘉興藏目錄』というタイトルであつたものと思われる。

さて、本目錄の全體的な構成は、つぎのとおりとなつてい

る。

一、楞嚴經坊重訂画一縁起 順治四年（一六四七） 朱茂時等撰

二、懇免賒請經典説 朱大猷撰

三、藏函号字附（天魚）

#### 四、遵依北藏字号編次画一（天函・魚函）

#### 五、北藏缺南藏号附（合函・碣函）

#### 六、續藏經值画一（第一函～第九〇〇卷）

#### 七、又續藏經值画一

右によれば、本目錄は順治四年（一六四七）に諸經費の高騰により頒価を改定して画一の価格を定めた際の藏經目錄である。したがつて、その成立は順治四年以後なることはたしかである。しかし、「昭和法寶總目錄」では、正藏の目錄こそ対校本は一本であるが、續蔵部分では四種、又續蔵では三種、の各異本で対校がなされていて、嘉興藏全般に異種が存在したことを見えている。

まず、正藏部分の目錄では、底本と校本との間には、一二、三の仏典名に広略の差があつたり、前記『密雲禪師語錄』の収録位置に差異がみられるなどのほかは、さしたる相違はない。このことは、正藏部分はほとんど固定していて、印造の時期などによつても影響を受けていないことを示すものであろう。

これに対しても、續蔵と又續蔵については、底本と校本との差異のはなはだしさに驚かされるのである。まず、續蔵部分の底本と校本、およびそれらの所蔵をつぎに示してみよう。  
ちなみに、又續蔵部分は、左記のうちの校本②は存在しない。

〔底本〕

〔底本〕 民国二年刊本 大谷大

〔校本〕

〔校本〕 刊本 大谷大

〔甲〕 刊本 明治三五年刊本 大谷大

〔乙〕 ? (刊本力) 増上寺報恩藏

〔丙〕 ① 写本 大谷大

校注によれば、右の各本間には、採録する書目の出入、卷

冊の相違がはなはだしく、特に続蔵の⑦にいたっては、第六  
三函から第九〇巻までは大差があるため、その目録は別出さ  
れているほどである。また一方、駒沢大学には続蔵と又続蔵  
とを所蔵するが、右の各目録各本と比較すると、これまたい  
ずれとも異なり、分量的にもはなはだ多くなっている。

このような目録類の相違については、すでに『二十五種蔵  
経目録対照考釈』の編者による所説がもつとも妥当であり、  
また、われわれが台湾版「中華大蔵經」第二輯に収める影印  
本によつて嘉興蔵を用いる上で留意すべき基本事項であるか  
ら、あえて以下に意訳を示しておこう。「」の中は筆者の  
補筆である。

〔底本も甲乙丙丁の校本のいずれも〕各書目ごとの函に收まる

経典については、みな出入がある。駒大本の套数も同じではな  
く、部数の出入はもつとも多い。思うに、この両蔵は中国各地

で分在して印刻され、またその上に民間で既刊の書を取つて入  
藏した（後の例を参照）ので、明の万曆年間から清の雍正年間  
に至る長い歳月の間に、時とともに目録を編み、時とともに流  
通したので、各種の目録に不同が生じたのであろう。「中華大  
蔵經」の目録は、「昭和法寶總目錄」に所収する原目録を主と  
し、これに各種の目録を合わせて新目録を作つてある。「續蔵」  
は駒大目録の套数が不同なので、原目録によつて排列し、駒大  
目録の套数を下に注記している。「又續蔵」<sup>25)</sup> については、駒大  
目録では三套多いので、これを後に並べている。

ここにいう「駒大目録」とは、駒大所蔵の続蔵・又続蔵の  
総目録であり、天保一四年（一八四三）に円順によつて謄写  
された筆写本である。この目録を「昭和法寶總目錄」所収の  
底本と比較すると、続蔵で一八種、又続蔵で二二種、合計四  
〇種の典籍が増加しているのである。そして、これらの四〇  
種は、前記の校本四種の目録にもみいだされない典籍ばかり  
である。<sup>26)</sup> それらの多くは明清代の禪語録であるが、少なくと  
も一二種は他にまつたく伝本の知られぬ貴重書なのである。  
したがつて、これらの珍しい典籍類をすべて影印収録してい  
る「中華大蔵經」第二輯の資料的価値については、いまさら  
いうまでもないであろう。

以上、明蔵の目録三種について、それぞれ基本的な性格や  
問題点を考察してきた。その結果、北蔵の目録には異本もな

く、その入藏典籍そのままの目録であつたが、他の二種は、それぞれ限定された藏經の目録であるから、その依用には注意しなければならないことは明らかである。特に嘉興藏の統藏と又統藏の目録類は、藏經の差異によつて生じた異本であるという性格を熟知しなければならない。

そうした藏經の差異を生じた背景としては、明末清初における大陸の仏教、とりわけ禪界の活発な動きが反映していると思われる。この点については、統藏と又統藏の各入藏書を分析検討することによつて明瞭となるはずであるが、いまは所論の範囲をこえる。ここでは、明藏とその目録類について、以上のような基礎的理諳の上に立つて、そこに入藏している古禪籍をみよう。

### 三 明藏中の古禪籍

ここでは、明藏中に収録される古禪籍とその文献的歴史的傾向について考察しよう。

まず、上述の考察にもとづき、明藏に含まれる入藏禪籍を調査し摘出するためには、「昭和法寶總目録」卷二に収録される万曆南藏・万曆北藏・嘉興藏の各目録を依用し、これに万曆南藏の統藏部分、および、嘉興藏の増加典籍の中から該当するものを加えればよいわけである。ただし、万曆南藏の統藏部分については、これを明示する目録がないので、北藏

の統藏部分と同一であるとみてとり扱うことにする。また、南藏・北藏・嘉興藏中の正藏、の三種に入藏する禪籍類の多くは対応関係にあり、嘉興藏の統藏・又統藏は独自の編集であるから、入藏古禪籍を見る場合、便宜上二つのグループに分けて表示してみよう。

まず、第一グループでは、入藏禪籍の総数は三五種である。この中には明代の撰述書六点も含まれるが、各書目ごとに藏經のNoと函号を付して藏經別に対照させたのが〈表一〉である。初入藏の典籍には○印を付して示した。

また、嘉興藏の統藏・又統藏中の禪籍については、該当典籍が三〇〇種以上にもわたり、そのほとんどが明清代の著述であるから、当該の目的である元代以前の古禪籍だけに限定して三六種を摘出し、これを別表とした。〈表三〉がそれである。

右に作成した二つの表の表面と、その作成過程から、三種の明藏に収録されている元代以前の古禪籍類が、いかなる傾向や特徴を示しているかを要約すると、ほぼ以下の諸点となる。

一、南藏の正藏部分は、前代までに入藏していない初入藏の禪籍九種を収める。

二、入藏書九種の傾向は、宋元代における盛期の禪宗典籍を総括している。

表二 明代所収佛籍一覽

○印：初入藏

入藏佛籍名		卷数	万曆南藏 (南)	万曆北藏 (北)	嘉興藏	南北兩藏本の底本
①宗	②護					
③景	④統	100	1502 阿一孰	1482 策溪	1480 策溪	
⑤円	⑥伝	100	1506 営	1495 旦	1493 旦	
⑦伝	⑧法	100	1507 桓公匡	1517 合濟弱	1515 合濟弱	
⑨輔	⑩法	100	1508 合扶	160	160	
⑪宗	⑫正	100	1509 扶傾	1524 漢惠	1522 漢惠	
⑬門	⑭宗	100	1510 繕	1522 回	1520 回	
⑮統	⑯正	100	1511 回	1521 綺	1519 綺	
⑰要	⑲宗	100	1512 回	1523 漢	1521 漢	
⑲統	⑳門	100	1513 遷	1520 綺	1518 綺	
⑳要	㉑大	100	1514 漢惠	1519 扶傾綺	1517 扶傾綺	
㉑統	㉒慧	100	1515 説感武	1525 説感武	1523 説感武	
㉒要	㉓普	100	1516 丁俊父	1526 丁俊父	1524 丁俊父	
㉓統	㉔覺	100	1517 密士	1518 扶	1516 扶	
㉔要	㉕禪	100	1518 密士	1518 密士	1518 密士	
㉕統	㉖經	100	1556 起	1578 起	1578 起	
㉖要	㉗疏	100	1607 石	1623 治於(統藏)	1623 治於(統藏)	
㉗統	㉘論	100	1609 雜田赤	1623 治於(統藏)	1623 治於(統藏)	
㉘要	㉙纂	100	1609 主	1608 主	1607 主	
㉙統	㉚解	100	1624 農	1632 農	1635 勸賞	
㉚要	㉛訓	100	1636 農	1636 農	1636 農	
㉛統	㉜規	100	1638 賞	1638 賞	1638 賞	
(以下統藏)						
(以下統藏)						
(以下統藏)						

## 明代の大藏經と古禪籍（椎名）

〔表三〕嘉興藏統藏・又統藏所收古禪籍一覽									
卷數	No.	函次	源津	諸詮集都	文直	心	心	密	永
一〇	1676	二八	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1680	三一	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1747	四二	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1756	四四	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1763	四五	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1783	五七	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1784	五八	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1785	六二	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1786	六〇一六一	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1788	五九	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1789	一七九	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1790	一七九	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1791	一七九	○	○	○	○	○	○	○
一〇	1792	一七九	○	○	○	○	○	○	○

(北)は永樂八年刊本

三、北藏の正蔵部分は、南蔵の入蔵書を踏襲しつつ、明代に編集された宗派色の強い典籍を削除している。

四、北藏の続蔵部分は、時代的国家的な色彩を帯び、多彩かつ融合的となっている。

五、嘉興蔵の正蔵は、南北両蔵の入蔵禅籍すべてを継承し、入蔵している。

六、嘉興蔵の続蔵・又続蔵は、主として明末清初の臨済宗の祖師に連なる系譜上の祖師の撰述書中、未入蔵のものを入蔵している。

右のような入蔵傾向や特徴について、より具体的にのべてみよう。

まず、南蔵の正蔵部分をみると、全一八種の入蔵禅籍中、ちょうど半数の九種が前代までの入蔵書、残る九種が新たに入蔵書となっている。ちなみに、元代までの各大蔵經に入蔵している禅籍は二三種ほどであるが、南蔵にはそのうちの九種が採られているにすぎない。しかもその中の『六祖壇經』は新たな重校本であるから、厳密には既入蔵の禅籍は八種のみということになる。

この八種の古禅籍を、南蔵はどこから採録したのであろうか。これは、つぎの第四項の問題なのであるが、あらかじめ考えておくと、宋元代の各大蔵經への入蔵禅籍を徵することにより、南宋から元代にかけて開雕された磧砂藏と、元代の

大普寧寺藏、および元代官版といわれる藏經、の三大蔵經が指摘されるのである。この三蔵經中の入蔵禅籍は、すべてを合してちょうど右の八種に等しいからである。この問題は、また次項でふれる。

つぎに、南蔵の正蔵部分に新入蔵の九種に注目したい。これらの典籍にみられる顕著な傾向は、燈史・語錄・公案の各分野において、宋元代の禪を総括する点である。すなわち、④『続伝燈錄』のよう『景德傳燈錄』以後における禪門系譜別の燈史、⑯『古尊宿語錄』のようの大部の語錄集成、⑪『宗門統要續集』や⑰『禪門頌古聯珠通集』といった公案集成、がそれである。これらの典籍を入蔵するということは、あたかも宋元代に爛漫として咲きほこった盛時の禪宗を、典籍の上で記念し総括しようとする意図的な態度とみてよいであろう。

意図的といえば、⑤『円悟禪師語錄』、⑯『六祖壇經』、⑮『古尊宿語錄』、⑰『禪宗頌古聯珠通集』の四種は、いずれも大慧派七世の定巖淨戒による重校本であり、これらの入蔵に淨戒が重要な役割を演じたことや、④『続伝燈錄』の編集が入蔵を前提とする円極居頂の仕事であつたことなどは、すでに柳田聖山・野沢佳美の両氏によつて指摘されている。<sup>(27)</sup>さらにもた、南蔵開雕のために勅を奉じて藏經の点校者として活躍し、金剛般若經・般若心經・楞伽經の三經に註疏をほどこ

した全室宗泐<sup>(28)</sup>は、淨戒の法叔という法系関係にあつた。両者の関係を示すと、つきのとおりである。

円悟克勤—大慧宗杲—拙庵德光—北磄居簡—物初大觀—

〔晦機元熙—笑隱大訴—覺原慧曇—定嚴淨戒〕

全室宗泐

特に淨戒は、みずから再編した『古尊宿語錄』全四八巻には、原本から一五万字も削除したにもかかわらず、右の系譜上につらなる拙庵から覺原にいたる大慧派の祖師たちの語錄を卷二一に一括収録している。しかし、この明白に宗派的意図的な編纂は、南蔵に該書の初入蔵こそ果たしたもの、つぎの北蔵ですぐに削除される原因になつたと考えられる。

すなわち、北蔵の正蔵部分は、全体的には南蔵の入蔵書を踏襲するが、④⑯⑰の三書を削除するところに特色がある。<sup>(29)</sup>⑮『古尊宿語錄』の削除は、原本のスタイルをいちじるしく改变した再編本とみなされたからであろう。こうした認識は、⑭『続伝燈錄』が『五燈会元』二〇巻から『景德伝燈錄』と重複する部分を除いて北宋以後の部分を改編した書であり、また、⑯『禪宗頌古聯珠通集』が後述のとおりの大巾な刪定本であることなどにも共通し、ともに権威主義を基本とする北蔵の性格とは合致しないがために、削除されたものと思われるのである。

しかし、北蔵も続蔵の時代となると、時代的国家的な色彩

が強まり、入蔵書は多彩で融合的となつてくる。すなわち、みられる國際性など、大明帝国の勅版大蔵經という国家主義的意識が明瞭にうかがわれるのである。さらに、⑰『鐸津文集』や⑲『万善同帰集』の入蔵は、当代における三教思想や禅淨思想の融合仏教的な傾向を反映するものであろう。このように、北蔵は続蔵の完成によつて、もつとも時代にふさわしい禅の古典を、権威の名のもとに収録することとなつた。この続蔵部分は、やがてそのまま南蔵に補続入蔵され、南蔵もまた同じ時代性をもつことになるのである。

つぎに嘉興蔵の正蔵部分は、すでに南北両蔵に入蔵していだ禅籍を、すべて採録している。ただし、南蔵に含まれながら北蔵で削除した五種の典籍中、『大明三藏聖教目録』三巻は採録せず、これに代つて同時代の禪語錄である『密雲禪師語錄』一二巻を入蔵したのが、わずかに異なる点であつた。したがつて、元代までの古禪籍にかぎれば、北蔵が省いた『続伝燈錄』『古尊宿語錄』『禪宗頌古聯珠通集』の三種が復活したことになるが、底本はかならずしも南蔵当時のそれをそのまま用いたのではないことは、次項でのべよう。

ともあれ、嘉興蔵のこうした編集態度は、民間における流通をめざした方冊本の藏經であつたから、権威ある官版の北

藏本を底本として南蔵本と宋元の各蔵経で対校したという学問的良心的な姿勢とともに、きわめて妥当な措置であつたと思われる。

さいごに、清代初期に相ついで完成をみた続蔵と又續蔵は、前述のように明末清初の禅界隆盛という背景を反映して、当代撰述の厖大な禅籍類を入蔵している。元代までの古禅籍に限ると、〈表三〉のように続蔵が三四種、又續蔵は二種、計三六種目となつてゐる。これらの入蔵禅籍の傾向は一様ではないが、概していえば、密雲円悟につらなる系譜の宋

元代の祖師中、『古尊宿語録』や個人語録として未入蔵の語録が多い。すなわち、そこには密雲一門の禅者たちによる入蔵への働きかけが示唆されるのである。いつの時代でも、もつとも優勢な宗派が自派の作品を最重視すること、例外はない。こうした姿勢による入蔵禅籍の質的な価値は、すでに古典となつてゐる厳選された宋元代の入蔵禅籍とは比較すべくもないが、反面、文献資料の保存という観点からは、後代の研究に裨益すること、はなはだ大なるものがある。

#### 四 入蔵古禅籍の底本

宋元版禅籍の文献史的研究という目的からは、明蔵に入蔵している古禅籍類が、はたしていかなる底本にもどづいてい

るかが、もつとも大きな問題である。しかし、各蔵経ごとの

該当禅籍は明らかとなつても、影印テキストのある嘉興蔵と南蔵の一部分についてはともかく、南蔵の大部分と北蔵に関しては閲覧じたいが容易でないため、他の補助的な各種の資料によつて検討を進めなければならない。当面の補助資料としては、嘉興蔵本中の南北両蔵の校注、『閱藏知津』の解題、先学による研究や報告などである。以下、これらのテキストや諸資料によつて、古禅籍類の底本を考察してみよう。

##### (一) 南蔵

まず、南蔵中の古禅籍の中では、すでにその底本が紹介されているものがある。すなわち、かつて竜池清氏は福州鼓山の湧泉寺に所蔵される南蔵の調査報告を「鼓山怡山藏逸仏書録」の論文中で公表し、刊記によつて明瞭となつた禅籍三点の底本を紹介している<sup>(32)</sup>のがそれである。それらによれば、(6)『伝法正宗記』は磧砂版大蔵経本、(12)『大慧禪師語録』は北宋の福州東禅寺版大蔵経本、(13)『中峰和尚廣録』は元の大普寧寺版大蔵経本、をそれぞれ底本とするものである。これらの事実から推察をめぐらせば、宋元代の大蔵経では常に(6)のつぎにおかれている(7)『伝法正宗定祖図』(8)『伝法正宗論』(9)『輔教編』の三種もまた、(6)と同じ磧砂藏を底本とするものと考えられる。

また、新入蔵である(2)『護法論』は快友寺本の写真<sup>(33)</sup>があ

るが、惜しむらくは巻首を欠き、ここに序文等があつたか否かが不明である。その上、本文に付される諸記の構成は、從来知られる多くの異本のいずれとも合致しない。さらに、後代の嘉興藏本の『護法論』は、底本を「藏本」なる校本で対校した校讃が付刻されているが、この校讃を『護法論』の諸版<sup>(34)</sup>にあたって精査すると、「藏本」こそは南藏本であり、南藏本は他の諸版とはまったく系統を異にすることがわかる。たしかに、南藏本のテキストは、現存最古の至元二年（一三三六）跋刊本（内閣文庫蔵）と比較しても、巻末に多くの諸記事を含まない素朴な版である。これらのことから、南藏本の底本は古い宋版ではなかつたかと思われる。

①『宗鏡錄』と③『景德伝燈錄』は、ともに宋元代のほとんどの大藏經に入藏している有名な禪籍であるから、南藏本の底本も前代までの大藏經本であると思われる。後者については、「中華大藏經」第一輯第三三冊に磧砂藏經本を底本とし欠張部分を大普寧寺版と永樂版で補つて影印しているが、この永樂版こそは永樂南藏本である。そこで、該当部分数か所を他の『景德伝燈錄』の諸版と照合すると、この永樂南藏本は文字の異同状況、巻頭の「西來年表」や序のないこと、各巻末に音釈をもつこと、などからみて、少なくとも元の延祐三年（一三一六）版よりも古く、また、大普寧寺版藏經とも異なることが知られる。さらに、『閱藏知津』巻四二の中

で、本書の南北両藏を解説するうちに、「祖師一千七百十二人、内九百五十四人、有語見録、余七百五十八人、但存名字<sup>(35)</sup>」とある祖師の人数からみると、底本は福州東禪寺版・同開元寺版のいずれかの宋版大藏經本ではないかと思われる。

④『続伝燈錄』は入藏を前提とする新編の燈史であるから、底本はなく、南藏本が最古のテキストである。

⑤『円悟禪師語錄』⑯『六祖壇經』⑰『古尊宿語錄』⑯『禪宗頌古聯珠通集』の四種は、前述のように定嚴淨戒による重校本である。⑭については以前から快友寺本の影印が紹介され、内容的には底本などは定めがたい独特の新編本である重校本である。⑮については以前から野沢氏に<sup>(36)</sup>指摘されている。また、⑤と⑯についても野沢氏によると前掲の調査研究によつて、それぞれ嘉興藏本とは異なることが指摘されている。<sup>(37)</sup>⑤の一七卷本は古文内容や構成をもつことが指摘されている。⑤の一七卷本は古版の一〇卷、嘉興藏本の二〇卷と異なり、全テキストの系統等については今後の検討を期したい。⑯は『閱藏知津』巻四二の解題では、南藏本は全二一卷で前に張揄の序があるとされ、嘉興藏本が全四〇卷で六つの序跋をもつテキストとは異なることが知られる。事実、快友寺本の写真を照合すると、

卷次編成は大巾に圧縮されている。おそらく淨戒は、元代に魯庵普会が増集して四〇卷としたものを、全二一卷に節録して入藏本としたのであろう。

⑩『明覺禪師語錄』についても、野沢氏によつて嘉興藏本との小異が指摘されている。<sup>(39)</sup>この語録は宋代以後の刊行史の上で特に複雑な禪籍の一つであり、その総合検討はやはり後日を期したい。

⑪『宗門統要續集』は、筆者が比較的に遺存巻数の多い立正大学の南蔵本を調査した結果、全二〇巻という南蔵本の調査は、元の泰定二年（一三三五）刊本の一巻を分巻したに過ぎないことが判明した。後に嘉興藏本は、これをさらに開いて二二巻とするのである。なお、南蔵本の底本は、泰定二年本を元代末期<sup>(40)</sup>ころに重刊した四明大慈寺刊本であろうと思われる。<sup>(16)</sup>の『永嘉集』は影印紹介が一張のみであり、他の補助資料からも底本をさぐることはできない。

以上のように、南蔵中の禪籍については、既入蔵のものは宋元代の入蔵書を底本とする傾向が知られる。ただし、その蔵経は一定せず、撰別している様相にある。また、新入蔵の禪籍については、従来の宋元版を重編・改編した新しいテキストを入蔵する傾向がみられる。その理由については難解であり、いまは言及を避けるが、南蔵の禪籍類は多方面からのテキストを底本としていることだけはたしかである。

## （二）北蔵

つぎに、北蔵の場合はどうであろうか。以下のところ、現

物はみられないものであるが、北蔵は嘉興藏が底本としているとされるから、後者によつて前者を類推することも可能である。また、後者の中でも一部の典籍は南北両蔵と対校を行つてあるから、三種のテキストの異同を知りうる場合もある。しかし、個別に検討すると、前述のような南蔵と嘉興藏との各テキストに大差のある場合は、北蔵本がどちらに類するテキストであつたのかについては、けつして予断を許さないものがある。

しかしながら、北蔵中の古禪籍は、南蔵中に入蔵しているものについては、書目を踏襲という点からみても、ほぼ南蔵本を底本としているとみよいであろう。問題は、万暦年中になつてからの続入蔵部分の古禪籍一〇種である。これらは直接資料がみられないもので、年代的には近い嘉興藏本と、快有寺の南蔵続蔵部分の写真によつてみるとしよう。

まず、㉕『勅脩百丈清規』は底本が正統七年（一四四二）の重刊本であるから、これがそのまま北蔵本の底本であろう。また、㉖『鐸津文集』は、快友寺本の写真によれば嘉興藏本と同じであるから、永樂八年（一四一〇）の南石文琇重刻本が底本であろう。<sup>(41)</sup>さらに、㉗『万善同帰集』は、成化四年（一四七八）の刊本が底本かと思われる。また、㉘『伝心法要』は、快友寺本の写真と嘉興藏本とは文字の異同があり、底本は不明である。その他については類推の域を出ない

が、総じていえば、北藏の続蔵として新入蔵した古禪籍類は、元代から明代にかけて流行した典籍が多いため、その底本もまた当代の刊本が多く採られたものと思われる。

### (三) 嘉興藏

さいごに、嘉興藏本の底本はどうであろうか。まず、正蔵部分は南北両蔵の入蔵禪籍すべてを収録している。したがって、勅版北藏を底本とする嘉興藏としては、禪籍についても同様であるが、北藏が欠く④⑯⑰の三点のみは、他から底本を求めたのに相違ない。これら三点の南蔵本は、嘉興藏本にくらべて著しく少量である。このことは、後者は前者が刪定しない以前のテキストを採録したと推定させるものである。

つぎに、続蔵・又続蔵の中の古禪籍は、正蔵の場合と同じく「中華大藏經」第二輯に収録される影印テキストによつて、大半は本文がみられるのであるが、この影印には少なからぬ異版が収められているので注意しなければならない。さきの〈表三〉に掲げた古禪籍の中には、この明版以外にテキストの知られないものや、明版が現存最古のものもあって、底本の推定は至難である。以下、推定できるものだけにとどめたい。

(3) 『心賦注』は洪武二年（一三七八）刊本、(9) 『頓悟入道要門』は洪武六年（一三七三）刊本、(20) 『應菴禪師語錄』

は隆慶六年（一五七二）刊本、(24) 『高峰禪師語錄』は万曆二七年（一五九九）刊本、(27) 『元叟禪師語錄』は洪武七年（一三七四）刊本、(36) 『千巖禪師語錄』は洪武九年（一三七六）刊本が、それぞれ底本に擬せられる。

また、宋元版を底本としている可能性のある典籍名をあげると、(1) 『楞嚴經合論』、(8) 『碧巖集』、(11) 『人天眼目』、(14) 『五燈會元』、(17) 『楚石禪師語錄』、(21) 『密菴禪師語錄』、(28) 『端獅子語錄』、(29) 『羅湖野錄』などがあり、比較的に重要な禪籍の多いことが注目される。

このように、古版の保存という観点からみると、該当する典籍はあまり多くはない。一般的にいえば、続蔵・又続蔵所収の古禪籍類は、明代に重修・再編などの手を経たものが少なくないようである。しかし、こうしたいわば改変的な作業は、やはり時代の要求に応じたからであろう。とすれば、その是非はともかく、宋元代の古版よりも、むしろ当代において新たに編集しなおされて新版を入蔵底本とする傾向は、自然のなりゆきであつた。入蔵や再編のための善本探索も、かなり意欲的に行われたようである。そんな事例をさいごに紹介しよう。

嘉興藏の正蔵開雕事業に最初から関与し、大きな功績をのこした密藏道開（\*一五八五）の遺著に、『藏逸經書標目』<sup>(42)</sup>がある。本書は、密藏が北藏未収の仏典を、禪籍を中心

として広く諸方にさぐり、その書目を挙げて刊行者・所在・揀弁などの語を付した、一種の仏書目である。したがつて、嘉興藏開雕に際しての当事者の関心を知らしむるのみならず、文献史的にみても貴重な資料となつてゐる。

密藏は達觀真可の弟子ではあるが、純粹な禅者ではない。そのためか、本書中にもみられる禅籍個々に対する書評・揀弁の態度は厳しく学問的であつて、むしろ客観性に富む。い

ま、正藏のみならず、続藏・又続藏に収録される古禅籍中、この『藏逸經書標目』中に、それらの旧刊者や存在が明記されているものを抄出し、所在別に整理して掲げてみよう。

秀水楞嚴寺……………万善同帰集・禪林僧宝伝・林間錄・楞嚴經合論・楚石禪師語錄

秀水東禪寺……………五燈会元・円覺經略疏鈔・雪巖禪師語錄

秀水精嚴寺……………高峰和尚禪要・宗門武庫  
秀水馮開之……………大慧禪師年譜

常熟瞿元立……………禪林僧宝伝（宋元本）  
常熟……………正法眼藏

天台華頂山……………無見禪師語錄

太倉玉鳳州……………古尊宿語錄（宋本）  
五台北台溝中庵……………万善同帰集

右にみえる地名中、秀水は浙江常熟の秀水県、太倉は江

蘇省太倉県、にそれぞれ該当する。してみると、密藏が探索し蒐集したと思われる古禅籍の大半は浙江と五台山であることが知られ、あたかも嘉興藏の開版地と一致している。『藏逸經書標目』に著録される禅籍中、正藏への入藏書はけつして多くはないが、後の続藏・又続藏には大半が収録されているから、密藏の仕事は後人を大いに裨益したものと思われる。

以上、きわめて不充分ながら、明藏全体に入藏している古禅籍類について、目下なしうる範囲の文献史的な考察を行つてきた。おそらく、当代における禅界の趨勢という背景を加えて考察すれば、より客観性のある歴史的な実態が把握できるであろうが、いまは当面の範囲をこえる。直接的には、宋元版のテキスト研究の上からは、古版の重刊書を底本とする入藏書の確認は寥々たるものであった。この点では、宋元代の大藏經そのものや、現存する覆宋元版として質量をほこる五山版・高麗版の禅籍に比すべくもないのはいうまでもない。

しかし、明藏は、北藏を承ける清代の竜藏や、嘉興藏を模刻するわが黄檗藏、そして近代における縮藏・卍藏・卍續藏・大正藏へと、後代に及ぼす文献的影響ははかり知れないほど大きく、テキスト的には大きな流布本の流れを形成して

いる。そして、その流れは、宋元版・高麗版・五山版などの古版系の系統に対し、重要な対校資料となる点において、貴重な価値をもつものである。

## 註

(1) 拙稿「宋元版大藏經と入藏禪籍」(『駒沢大学仏教学部論集』第一六号、昭和六〇年一〇月)

(2) 本稿は、拙稿「明版大藏經と宋元版禪籍」(『宗学研究』第二七号、昭和六〇年三月)を基にして、大巾に書改めたものである。

(3) この論文は、「歐陽大師遺集」(台北、新文豐出版公司、一九七六年)第三卷、一四七一页～一四八四頁、に再録されている。なお、この論文の紹介を兼ねて洪武南藏を考察したのに、野沢佳美「明初の洪武南藏について—呂激氏の『南藏初刻考』を通して—」(『立正史学』第六九号、平成三年三月)、がある。

(4) 張新鷹「關於佛教大藏經的一些資料」(『世界宗教資料』第四期第一号)

(5) 「明代以降における藏經の開雕Ⅰ～Ⅲ」(愛知学院大学論叢『一般教育研究』第三〇巻第四号～第三一巻第二号、一九八三年九月～一九八四年三月)。なお、この論文は長谷部幽蹊『明清仏教研資料—文献之部—』(名古屋、駒田印刷、昭和六二年一二月)の中に再録されている。

(6) 『立正大学図書館所蔵明代南藏目録』(立正大学図書館、平成元年二月)。

月)。

(7) 「山口県快友寺所蔵明代南藏続入藏一覽」(『立正史学』第六四号、昭和六三年九月)。なお、快友寺南藏についての論文には、同じく野沢氏に「山口県快友寺所蔵の明代南藏について—江戸時代に輸入された大藏經—」(『第二屆中國域外漢籍國際學術會議論文集』(一九八九年二月)、がある。

(8) 『山口県快友寺所蔵明代南藏初入藏經典集』(宗教典籍研究会、平成三年三月)。

(9) 『立正大学図書館所蔵明代南藏本古尊宿語錄』(立正大学図書館、平成元年二月)。『山口県快友寺所蔵明代南藏本古尊宿語錄』(立正大学内宗教典籍研究会、平成元年六月)。

(10) 注(4)の張氏論文によれば、南藏は洪武五年(一三七二)に始まり永樂元年(一四〇三)に完成したが、その後板木を保管した金陵天禧寺(後の報恩寺)が火災に遭い板木を焼失した。以後、永樂一〇年から同一五年に再刻されて同一七年(一四一九)に完成した。ゆえに前者を洪武南藏、後者を永樂南藏と区別し、別個の藏經としている。これに対して野沢氏は、永樂一三年ごろ報恩寺で南藏五千余巻を印造している文証と、立正大学本南藏の刻工者中に元末明初に江南で活躍している者一〇数名がみられることなどから、洪武南藏の板木は全焼せずにかなりは難を免れて永樂南藏に受け継がれたとされる(「明代南藏考—立正大学図書館及び山口県快友寺藏本を通じて—」(『立正史学』第六〇号、一九八六年九月)。「明末清初の南藏と補刻者」(『立正史学』第六三号、昭和六三年三月))。

(11) 「中国仏寺史志彙刊」第一輯第三冊（台北、明文書局、一九八〇年一月）卷頭の解題による。

(12) この序文は本書を補刻した天啓七年（一六二七）當時のもので、初刻の万暦三五年の二〇年後に相当するが、文意からは初刻の際に全五三巻としたと述べているから、「南藏目録」の収録は万暦三五年當時とみてよい。

(13) 「大藏之鑄、副墨貯於報恩琅函、布於寰宇。標舉其目、見端知委是藏目、不可無入也。」（「中国仏寺史志彙刊」第一輯第三冊、六頁～七頁）。

(14) 第二巻、二七一頁、脚注。

(15) 「中国仏寺史志彙刊」第一輯第五冊、一〇八九頁～一〇九二頁。

(16) 長谷部幽蹊『明清佛教研究資料—文献之部—』、一四頁～一五頁。

(17) 武林藏については、張氏前掲論文の武林藏の項、及び長谷部氏前掲書（一二二頁～二五頁）にくわしく述べられている。

(18) 長谷部氏前掲書、三一頁～三二頁。

(19) 同右、三二頁。及び、道安「中国大藏經雕印史」（「現代仏教學術叢刊」<sup>10</sup>『大藏經研究彙編（上）』（台北、大乘文化出版社、一九七七年六月）、一五八頁。大藏会編『大藏經—成立と変遷—』（京都、百華苑、昭和三九年一一月）、八二頁。なお、さいごの『大藏經—成立と変遷—』中の明藏に関する記事は、前掲の道安氏の論文中における明藏関係記事の意訳である。

(20) 「昭和法寶総目録」第二巻、三二二頁中。

明代の大藏經と古禪籍（椎名）

(21) 同右、三二七頁下。

(22) 三〇〇頁の脚注①。

(23) 「仏書解説大辞典」（東京、大東出版社、昭和八年一月初版）第二巻、二二一頁下。

(24) 「昭和法寶総目録」第二巻、三三七頁の脚注①。

(25) 「各自每函收経皆有出入。駒本套数不同、部数出入尤多。蓋比両続分在各地刻製、亦兼取坊間已刻之本入藏（參見後例）、由明万暦年至清雍正年之悠長歲月、隨時編目、隨時流通、致各種目録不同。「中華」藏目、以原目為主、彙合各種目録、製訂新目、「続藏」駒目不同套数、依原目排列、注駒目套數於下。又續駒目增三套、並列於後。」（蔡運辰『二十五種藏經目録対照考計』（台北、新文豐出版公司、一九八三年一二月）、五一一页）。

(26) この二二種を、駒沢大の目録函次別に列記しておく。

曹溪一滴附夢語摘要・大巍禪師竹室集（続六七）、天童弘覺慈禪師北遊集（続七二）、高峯三山來禪師年譜（続八七）、艸峯憲禪師語錄（又続一二）、大悲妙雲禪師語錄（又続三三）、空谷道澄禪師語錄・大博乾禪師語錄・盤山朗空禪師語錄・盤山宗禪師語錄・逕庭宗禪師語錄・別牧純禪師語錄・天翼翔禪師語錄・雲山燕居申禪師語錄・昭覺竹峯統禪師語錄（又続四四）、竺峯敏禪師語錄・野雲映禪師語錄・普門顯禪師語錄・鑑堂一禪師語錄・翠崖必禪師語錄・斗南晦禪師語錄（又続四五）、博山粟如禪師語錄（又続四五）。

(27) 柳田聖山「古尊宿語錄考」（『花園大学研究紀要』第二号、昭和四六年三月）、野沢佳美「明代南藏本『古尊宿語錄』に

ついて」（『禪學研究』第六八号、平成二年三月）。

(28) 宗泐と南藏の関係については、長谷部氏前掲書（六頁）に

のべられている。

(29) この事実は野沢氏前掲論文「明代南藏本『古尊宿語錄』」に

ついて」の中で詳述されている。

(30) 柳田聖山「禪籍解題」（『世界古典文学全集』36B、『禪家

語錄II』（東京、筑摩書房、昭和四九年二月）、五〇一頁。

(31) 道安氏前掲論文、一五八頁。『大藏經——成立と変遷——』、八

二頁。

(32) 『東方学報』第六冊（東方文化学院東京研究所、昭和一一

年二月）。なお、本論文中に紹介される南藏の綺函第一巻

『伝法正宗記』巻首の刊記を転載しておく。

平江路磧沙延聖寺大藏經局今依福州開元禪寺校定元本伝法正

宗記一十二巻重新刊板流通祝延

聖寿万安者其明教大師所上之書及入藏劄子旧本皆在表尾今列  
於首庶期展卷備悉所從

延祐二年歲在乙卯五月 日住持伝法比丘清表題

(33) この写真は、野沢佳美氏の撮影されたものである。以下の  
写真も同じ。

(34) 拙稿「『護法論』の諸版とその思想的基盤」（『曹洞宗研究  
員研究生研究紀要』第一〇号、昭和五三年八月）、を参照さ  
れたい。

(35) 「昭和法寶総目録」第三巻、一二四〇頁中。

(36) 「禪學叢書」之七『六祖壇經諸本集成』（京都、中文出版  
社、一九七六年七月）、一六五頁～一八八頁。

(37) 駒沢大学禪宗史研究会編『慧能研究』（東京、大修館書店、昭和五三年三月）、資料篇第一章第二節、六祖壇經について、

の内（四一二頁～四一五頁）。

(38) 「昭和法寶総目録」第三巻、一二四一頁上。

(39) 前掲『山口県快有寺所蔵明代南藏初入藏經典集』附録、「解題」四頁下～五頁上。

(40) 四明大慈寺刊本については、拙稿「『宗門統要集』の書誌的研究」（『駒沢大学仏教学部論集』第一八号、昭和六二年一〇月）、を参照されたい。

(41) 拙稿「『鐸津文集』の成立と諸本の系統」（鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』（東京、大藏出版、一九八八年一二月）所收）。

(42) 駒沢大学所蔵、「松鄰叢書」甲編（北京、仏教流通処、一九一七年七月）所收。